

# ガーナにおける自立的展開が可能な谷地田水田開発

## —農民のプロジェクト評価—

近畿大学博後1年 中島 邦公

近畿大学 若月 利之

ガーナ土壤研究所 モロ M. ブリ

## Sustainable Sawah Development in Inland Valley Watershed in Ghana

### —The project evaluation by farmers

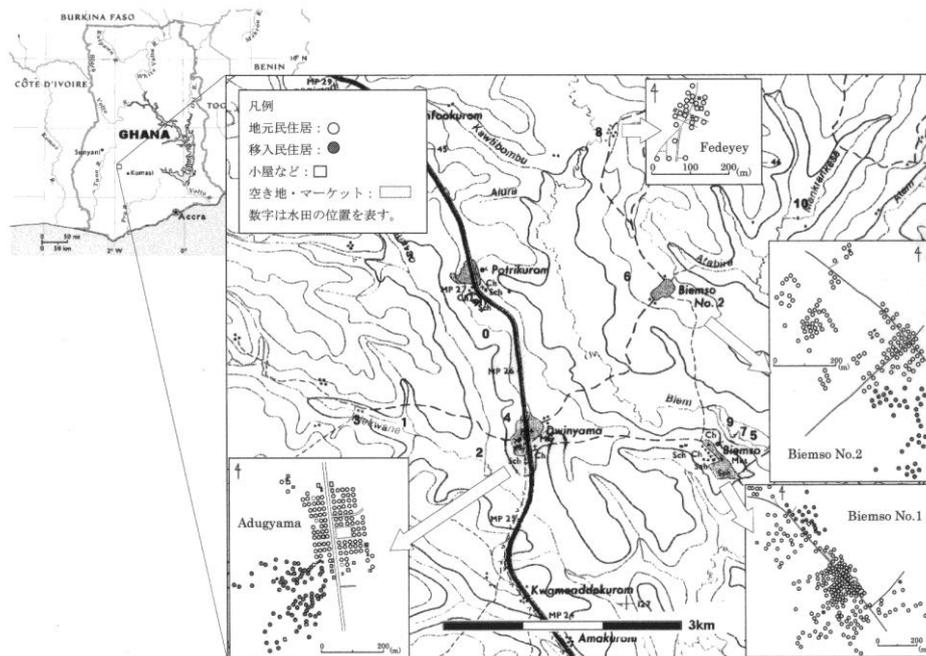
NAKASHIMA Kunitada, Kinki University

WAKATSUKI Toshiyuki, Kinki University

Moro M. BURI, Soil Research Institute, Ghana

コメの消費が伸び、入超状態にあるガーナではコメ自給に向けて耕地の外延的拡大から生産性向上への転換が必要との認識から、食糧農業省はアフリカ開発銀行より 20 億円の融資を得て、4500ha の水田開発を目指す内陸小低地コメ開発計画 (Inland Valley Rice Development Project, IVRDP) を 2004 年に始動した。高生産性、低環境負荷の水田はガーナにおいてもコメ増産に寄与し得る。しかし、土壌や水資源が限定されるアフリカ型の開発手法が求められる。この先駆的実験が、1997 年よりガーナ中部で行われているサワー (Sawah、水田の意) プロジェクトであり、ここで得られた堰の構築などの知見は IVRDP に反映されている。

fig. Sawah project sites



しかし水田の自立的な開発を成功させるには、主体となる農民についての知見も欠かせない。本研究報告はサワープロジェクトの参加農民、非参加農民を対象に、水田の経済性、農村社会、土地制度などの水田開発の社会的条件を農民の視点から明らかにする。

まず、水田開発に有利なはずの地主層より、ガーナ北部出身者を中心とする移入民の水田開発の意欲が高いこと、次に水田開発の農民集団構成員が社会的、経済的に均質な方が、開発が進むことを明らかにする。そして、水田耕作の認知に伴って、焼畑による移動耕作を前提としている在来の土地賃貸制度に、新しい賃貸形態が定着しつつある点を指摘する。最後にガーナにおける水田開発と IVRDP の可能性について考察する。